

## 書評

## 『ジュノー記念祭—ヒロシマからのルポとエッセイ—』

著者 天瀬裕康

発行所 溪水社

広島県医師会常任理事 柳田実郎



天瀬裕康こと渡辺晋先生は、長年、広島県医師会に所属する医師としての顔と、広島ペンクラブや広島文藝派を舞台とする文筆家としての顔とを併せ持ってこられたが、いずれの顔にも「戦争」「被爆」「ヒロシマ」の文字が色濃く映っている。1998年に出版された「半世紀後の反核戦争」をはじめ、評論「梶山季之の文学空間」、戯曲「昔の夢は今も夢」など、数多い著作が持つ幅広いテーマの中で、ある時は前面に押し出され、ある時は背後に隠され、「被爆」は語られてきた。今回の作品は、前者の作品の一つであり、先生が最も深くかかわってこられた活動の集大成でもある。

先生は13歳の時、被爆直後の広島に入られた、いわゆる入市被爆者である。「直接被爆でない負い目から、被爆者健康手帳は申請していなかったが、『手帳の交付を受けられない被爆者に対する証言をするためにも、自らが手帳を取得すべきだ』という助言により、64歳で手帳の申請をした」と著書の中で述べられている。先生の謙虚で誠実な人となりの表れの一つであろう。

先生は、IPPNW日本支部理事として、核戦争をはじめとするすべての戦争に反対してこられた。また、ジュノー博士の顕彰に関しては、ジュノー研究の第一人者として活躍してこられた。今回のルポルタージュには、顕彰碑建立までの経緯や、記念祭の開催とその継続に至る苦労談など、特筆すべき記述が多く含まれている。また、一つひとつの事実を確認するため、他県まで出向いて取材を重ねられるなど、誠実な研究者としての側面も心を打つ。

ところで、県医師会速報へのジュノー記念祭の報告文は、第1回から第11回まで先生が書かれ、第13回から私が引き継いだ形になっているが、リズムのある流れるような先生の文体に比べ、テープを起こしただけの報告書然とした文になっており、ただただ恥じ入るばかりである。

先生は、これまでに関わってこられた多くの分野を、各論のような形で、文章に切り取ってこられたが、そろそろ総論とも言うべき、先生の半生を綴った文章を、読ませていただきたい気もする。その時、著者は「天瀬裕康」なのであるか？そのタイトルは「昔の夢は今も夢」なのであるか？